

【ポスター発表】

主介護者の日常生活環境と心理的ストレスとの関係

ー主介護者に対するアンケート調査からー

○ 宝塚医療大学 泉谷利彦（会員番号 004882）

津田理恵子 神戸女子大学（会員番号 007066）

キーワード3つ：主介護者、日常生活環境、心理的ストレス

1. 研究目的

本研究では、主介護者と要介護者の暮らす日常生活について主介護者の心的ストレスと主介護者と要介護者が暮らす日常生活環境との関係を調査し、主介護者の心理的ストレスの主要因が日常生活環境ではなく、多くの文献が示すように主介護者の心理を含めた内面環境の違いが主介護者の心理的ストレスの増強を起こしている主要な原因で在ることを、日常生活環境が近い状態に在る主介護者において、心理的ストレスを強く感じている主介護者と強く感じていない主介護者がほぼ同数存在する事から証明するものである。

2. 研究の視点および方法

在宅における主介護者の日常生活環境が、主介護者の心理的ストレスにどの様に関係しているかを調査する為に、在宅で介護を行っている主介護者に対して日常生活環境に心理的ストレスを対応させた個別の無記名アンケート調査を行った。

アンケート内容：主介護者の年齢、性別、職業、同居者、要介護者との続柄、要介護者の年齢、要介護者の要介護度、介護期間、主介護者と要介護者の生活の場所、主介護者の自由行動時間、MBIの燃え尽き症候群チェックシート。

アンケートの分析方法：アンケート結果を各質問項目ごとに、MBIの燃え尽き症候群チェックシートの情緒の枯渇、脱人格化、個人的達成感の低下の各項目ごとに、燃え尽き症候群の程度が低い人数と中等度以上の人数の相関関係を求めた。

3. 倫理的配慮

主介護者の方へのアンケート配布は開封した封筒に調査用紙を入れた状態で、協力施設の職員に主介護者の自宅もしくは通所施設において配布し、主介護者は自宅にて回答して頂き、調査用紙は封筒に入れ封緘し糊付けした状態で協力施設の職員の方に返却して頂く、回収をしたアンケート用紙は研究者の研究室で鍵のかかる場所に保管し、研究室にて開封および集計を行った。アンケートの集計に関しては、個人、地域を特定できないように名称を伏せた状態で集計を行った。

以上、調査研究に関して一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した。

4. 研究結果

アンケートは120部配布し、106部を回収し、その内94部の有効回答を得た。内訳は女性70名(74.46%)、男性24名(25.53%)であり、この男女比は、「平成28年国民生活基礎調査の概況・Ⅳ介護の状況・3主な介護者の状況」(以後は基礎調査と書く)で同居の主な介護者の年齢分布が女66.0%、男34.0%の比率と10%前後の差である。また主な介護者の年齢分布においても基礎調査と同じく主介護者の人数は50歳から79歳未満に多くの介護者が集中していた。

次に、要介護者の要介護度についても基礎調査と同じく本研究においても、要介護Ⅰ、要介護Ⅱ、要介護Ⅲに主介護者の介護している人数が最も多く、また、主な介護者と要介護者との続柄に関しても基礎調査と同じく本研究においても主介護者が介護している人数は配偶者と実子が最も多くなっていた。

そして、アンケート調査項目の日常生活環境におけるMBIの燃え尽き症候群チェックシート全30項目のバーンアウト徴候の低いと中等度以上の主介護者の人数の関係は、30項目中28項目に0.6~0.2の正の相関関係を示していた。しかし、要介護者の介護度における個人的達成感の低下(-0.229)、そして主介護者の自由行動時間における個人的達成の低下(-0.1746)の2項目が低い負の相関関係を示していた。

5. 考察

アンケート項目の日常生活環境におけるMBIの燃え尽き症候群チェックシートを使った主介護者のバーンアウト徴候の低い人数と中等度以上の人数との関係は、30項目中28項目に0.6~0.2の相関関係を示している事を主介護者の人数から考察すると、主介護者がアンケート調査の同じ日常生活環境の各項目において、正の相関関係を示している事を主介護者の人数から見ると、主介護者のバーンアウト徴候の程度が低い主介護者の人数と中等度以上の人数がほぼ同数である事が解る、これらの主介護者の人数の関係から考えらる事は、主介護者の日常生活環境が主介護者のバーンアウト徴候に影響を及ぼして主介護者のバーンアウト徴候の程度を変化させているとは考えられない事である。しかし、少数であるが要介護者の介護度における個人的達成感の低下が-0.229を示していた。また、主介護者の自由行動時間における個人的達成の低下が-0.1746を示してゐる事から、これらの項目においては主介護者のバーンアウト徴候の程度に何かしらの関係が有ると考える。

以上の事から、主介護者のバーンアウト徴候の増減に主介護者の日常生活環境の変化が多くの場合に関係していない事が証明できた考える。

本研究では、主介護者が主介護者の日常生活環境によってバーンアウト徴候を起こすことが少ないという結果を得る事は出来たが、では、なぜ同じ日常生活環境においてバーンアウト徴候の低い主介護者と中等度以上の介護者が同等数存在するのかの理由を見つける事は出来なかった。これらは、今後の研究課題であると考ええる。